

第20回 ジャズ・ミュージシャンによる 一人3役の斬新な名曲

GSブームの絶頂期に登場した異色グループ、ザ・ハプニングス・フォーのリーダー、クニ河内が作詞作曲した『そっとおやすみ』は布施明が歌って大ヒット、今や日本のスタンダード曲になりましたが、「背中ボタン」という言葉から連想してしまう歌があります。

60年ほど前に作られた歌ですが、今聞いても古さを感じさせません。『爪』（歌・ペギー葉山）と『あいつ』（歌・旗照夫）です。

歌謡曲では使われないコード進行を用いたメロディーに乗せて男女の別れと未練が歌われていますが、歌詞もまた斬新なものでした。

『爪』では、それまで（昭和33年頃まで）の歌謡詞には見られなかった「アパート、癖、爪」といった日常生活に身近な言葉を持ち込んでリアリティーを感じさせ、『あいつ』では物語の中に友人という第三者（あいつ）を登場させる構成がユニークでした。両曲共、作詞作曲したのは昭和6年生まれのジャズ・ミュージジ

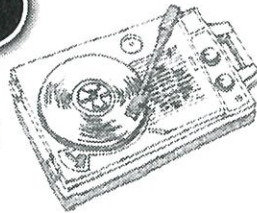
シャン平岡精二で、編曲もしています。

ロカビリーブームが爆発する直前

名曲カルテ

昭和歌謡と いつまでも

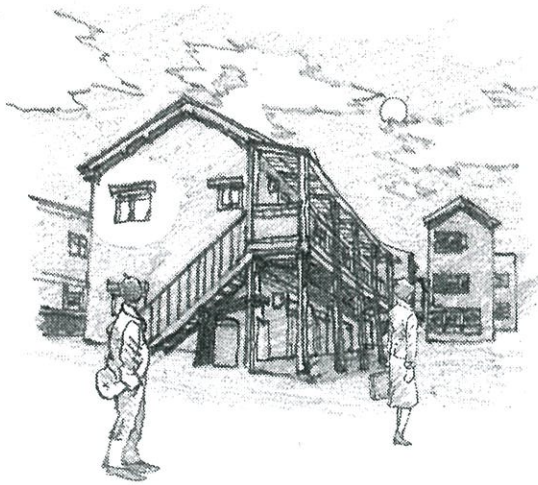
堀井六郎
絵・松本浦



の昭和33年前後に『爪』↓『あいつ』の順に創作されたようですが、旗照夫の『あいつ』は昭和33年4月に新東宝映画『女体棧橋』の主題歌『想い出』のB面曲として発売（この映画で旗はクラブ歌手「照夫」としても出演）、ペギー葉山の『爪』は昭和39年に『ラ・ノビア』のB面としての発売でした。

なお、『NHK紅白歌合戦』では、どちらの曲も歌われていません。大ヒット曲というわけではなく、じわじわと人々に浸透していく「隠れた名曲」の成立パターンですね。

この2曲に対しては、『爪』のアンサーソングが『あいつ』だとか、作者の平岡精二が恋人だったペギー



葉山に捧げた求愛ソングだとか、爪を噛む癖はペギーのほうだった、などといったさまざまな憶測が流れました。

平岡自身が歌うバージョンもありますが、女性的なやさしい歌声を聴くと、その後、陸続と登場してくる一人3役のシンガーソングライターたち、荒木一郎、さだまさし、そして小椋佳など、語りかけるような私小説風作品の自作自演ソングライターたちは、意識せずともこの人の影響を知らずに受けているような気がします。

もしかしたら、GSブームやその後のアイドル全盛時代を牽引した一世代下の青学の後輩、橋本淳と筒美京平（二人は同じジャズバンドに在籍し、それぞれベースとピアノを担当）にも影響を与えていたのかもしれない。

昭和49年に青山学院全体が歌える校歌を作曲、それ以前にも「第二の学院歌」と称される『学生時代』を創作し2年後輩のペギー葉山に歌わせた平岡精二。生涯独身を通し、58歳で没してから、すでに28年。今頃は泉下のキャンパスでビブラフォンを弾きながら、昨年旅立ったペギーらとともに学園ソングを歌っているかもしれません。